ひめゆり通信

第153号
2018年3月15日号
http://hozanji-wel.org/

主な目次

- 巻頭言 …… 1
- 皇居参内拝謁の記 …… 2
- 瑞宝双光章 …… 3
- 各施設より …… 4
- 法人年頭連絡会 …… 13
- 法人研究発表会 …… 14
- 全国表彰 …… 16
- 仔鹿園40周年 …… 18
- リーダー研修 …… 20

社会福祉法人 宝山寺福祉事業団 〒630-0257 奈良県生駒市元町2-14-8 桃李館内 TEL:0743-74-1172 / FAX:0743-74-1911

会計監査人の設置義務化

宝山寺福祉事業団理事長 辻村 泰範

社会福祉法人制度の大改革が実施されて一年が経とうとしている。

我が法人にとっては、それなりの準備や既に取り組んでいることも多かったので、大きな混乱や戸惑いがあったわけではないが、新たに経験することになった最も大きな出来事は、会計監査人を置くことが義務付けられたことである。

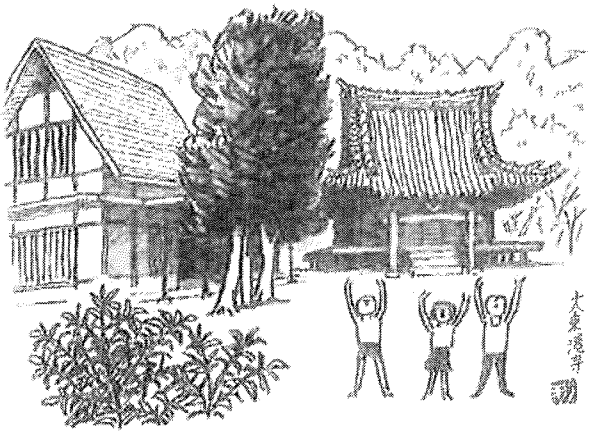
これまでも社会福祉法人は、毎年所轄庁による監査を受けている。ところが世の中には、ほんのわずかだが、不祥事を起こしたり不明朗な会計処理を行って眉をひそめざるをえない法人の事例も報告されてきた。おそらくは心根の怪しげなワンマン経営者や遵法意識の希薄な職員のなせるわざではあろうが、あってよかろうはずがない。それを見落としてきた行政の監査能力や責任も責められなければならない。とは思うのだが、そこで大規模な法人は率先して経営や財務の透明性を高め規律の強化を内外に示すことが求められることになったのであろう。年間の財政規模が三〇億円を超える法人には、役員としての監事とは別に会計監査人を置くことが義務付けられた。

我が法人は毎年決算報告を公開しているように、既に三〇億を超える規模になっている。全国に存在する約二万の社会福祉法人のうち約一%が該当したそうである。

適正に運営しているつもりであっても公認会計士法に基づくルールと基準に基づいて実施される監査は、これまでの行政による監査とは全く異質なものと言ってもいい。我が法人が契約した監査法人には監査チームを編成して、着実に監査を進めてもらっている。

初めての受審は、求められる事務量も多く、なかなか厄介ではあるが、調査を受けている過程で気づかされること学ぶことがいかに多いか身にしみる。全員で我が法人の名に恥じない運営に心がけようではないか。

監査法人の会計監査人を置くことを誇りとしよう。



宝山寺福祉事業団の原点ともいえる場所「大乗滝寺」

皇居参内拝謁の記

宝山寺福祉事業団理事長　辻村　泰範

11月3日に正式発表があるまでは、スピード違反や駐車違反などしないように品行方正に過ごしてくださいね。もしいただく意思がないのなら、そのようにお返事ください。

県の所管課の担当者から秋の叙勲の候補に上がっていることの通知があったそうだ。

こちらは思わず、酒を飲みすぎて酩酊してしまったりしたらどうなるんでしょうと問い返したかったが、直接受話器を取ったわけではないので馬鹿げた質問はせずに済んだ。勿論ありがたく頂戴いたしますに決まっている。しかし世の中には固辞される方もいらっしゃるのだそうだ。どなたが辞退されたのか公表されないのでエライ人がおられるものだと思うしかない。

神妙に過ごしていると、10月の25日を過ぎた辺りから代議士の先生方などから祝電が届き始める。驚いたのは、同時と言っていいタイミングで次々と勲記や勲章を飾る額縁や記念品などのカタログが宅配便で届き始めるのだ。マスコミなどの公式発表は11月3日の筈なのに、どうしてこの人たちは、私の名前や住所を知っているのだろう。すわ個人情報の漏洩かと気色ばんだが、後になってさもありなんと納得した。実は、25日に叙勲者名簿が閣議決定されるので25日には代議士先生方には情報が届けられる。老舗の業者はぬかりのあろうはずもない。

県から授賞の正式な通知をいただき、11月6日に県庁で伝達式があること、11月8日には皇居に参内し天皇陛下に拝謁する儀式があることなどの一連の流れを文書でいただいた。世が世なら、いや今でもそうだがこれは一大事である。

あげるというからもらってやるさ、と不遜な言辞を平気で口にする人に出会うこともあるがとんでもない。今回も、坂下門から皇居にバスが入り、ここからは一切写真はご法度と言い渡されると、みんな素直に従っている。いよいよ宮中春秋の間に通されて、陛下のお出ましを待って整列する頃にはどの人もこの人も緊張して神妙な顔つきになっている。もちろん私も家内も直立不動だ。

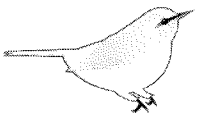
陛下が労いと励ましのお言葉を述べられた後、かるく会釈しながらみんなの列の前を通り過ぎて行かれる時は緊張も最高潮であった。それからバスごとに階段下のロビーで記念写真を撮っていただくのだが、厚生労働省関係だけで20台の大型バスなのだからその間の待っている時間は相当なものだ。拝謁が終わって緊張は解けたというもののわずかばかりの椅子が壁際に用意されているだけなのだから、それがいくらシルバーシートだと言っても皆さんがご高齢なのだから、着物姿で絨毯の上に座り込んでいらっしゃる方がいらしても無作法などと言っている場合ではない。バスが厚生労働省に戻って解散となった頃には日はどっぷり暮れていた。

昨秋の叙勲で、瑞宝双光章という立派な勲章を授かることになった。ありがたいことである。長年にわたって公共に尽くした功労が認められたというのが授賞の理由だということである。ドレスコードに従って貸し衣裳のモーニングに勲章をつけたのは、朝ホテルを出て拝謁が終わってホテルに戻って着替えるまでの半日だけだった。

奈良に帰って東京でのある種の高揚感が静まってくると、さすがに我に返ってくる。勲章はあくまで個人に授与されるものではあるが、自分は何者かという問いである。理事長として大きな法人を率いているとはいうものの、その実態はいかがなものであろうか。

あれも、これもと衣を剥ぎ、突き詰めてゆくと、そこにいるのはただ歳を経て筋肉のしぼんだ老人の姿に過ぎない。衣のように身を守って飾り立ててくれている現場のスタッフ達。職員と呼ばず、それぞれの持ち場で役割を果たしている一人一人、皆さん方をスタッフと言おう。彼らを身にまとわなければまさしく裸の理事長である。裸の施設長だ。よきスタッフに恵まれてきたからこその受賞であったことをつくづく考えさせられる。

歳を重ねたあかしのシワにこそお褒めを受ける資格を求めるのだと言うかもしれないが、身にまとうスタッフやそれを縫いつけている組織こそが世の中に顕れ見えていることを思うと、これは法人の受賞を私が代わって受けさせていただいたものだと感謝しなければならない。改めてそのことを心に刻んだ次第である。



瑞宝双光章　受章祝賀会

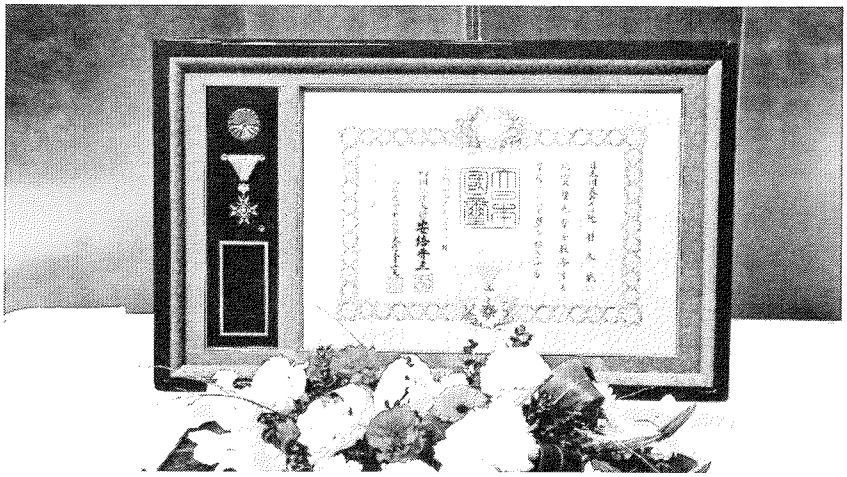
養護老人ホーム　梅寿荘　松岡　利和（発起人）

このたび平成29年度秋の叙勲におきまして、辻村理事長が瑞宝双光章、受章の栄に浴されました。瑞宝章は公共的な業務における功労に対して、授与される勲章でありますが、社会福祉分野における功績が広く認められてのことであります。この栄誉の喜びを分かち合おうと、2月12日にホテル日航奈良で祝賀会を開催いたしましたので、ご報告いたします。

冒頭、会を企画した発起人を代表して、安井宏一奈良県議会議員・法人理事が理事長の経歴と功績とを紹介し、祝賀会発起の思いと祝辞とを述べられました。続いて、来賓からの祝辞として、土井敏多奈良県健康福祉部長、小紫雅史生駒市長、植田誠奈良県老人福祉施設協議会会長のお三方に祝辞をいただきました。土井様は日ごろの奈良県行政における理事長の功績について、小紫様は生駒市政における法人の存在価値やご自身の福祉サービス利用経験談など、また、植田様には理事長のお人柄などを、ユーモアを交えてご紹介いただき、心温まる祝辞をいただきました。つづいて、法人総裁であられる大矢實圓大僧正猊下が理事長に記念品を、また、奈良県社会福祉法人経営者協議会からの増田敦子発起人が万里子夫人へ花束を贈呈されました。このあと、受章者本人からの謝辞をいただき、祝賀会前半のセレモニーを締めくくりました。

後半は祝宴とさせていただきました。磯彰格全国社会福祉法人経営者協議会会長に乾杯のご挨拶をいただき、宴が始まりました。友人を代表して小中章義様にスピーチをいただき、受章者夫妻で各テーブルをまわると、会場全体がお祝いの喜びに包まれました。各テーブルで記念撮影をおこなううちに、各方面の方々からお祝いのスピーチが寄せられ、楽しいひとときを過ごしました。終盤には大スクリーンを使って、宝山寺福祉事業団と理事長のこれまでの歩みを写真映像で紹介しました。閉会にあたりましては発起人の1人である真言律宗宗務長松村隆誉僧正にご挨拶いただき、祝賀会を終了いたしました。

当日は雪が積もるような天候であったにも関わらず、ご出席いただいた皆様にはあらためて誌面を借りてお礼申し上げます。また、会場の都合などによりご案内できず失礼してしまった皆様には、このご報告をもってご容赦いただきたいと思いますので、この旨を添えて祝賀会の報告といたします。



高齢者施設より

梅寿荘居宅介護支援センター

信頼される事業所に

センター長
斉藤　洋子

私たちの業務は、利用者の在宅支援のために多職種連携を行い、関係機関との顔の見える関係づくりに努めています。サービス事業所と利用者の状態、生活状況の把握、共有等、自立支援に向けたより良いプランに繋がるよう連携する機会を持ちます。しかし、折角顔や名前を覚え連携が取れ始めた頃に退職され担当者が交代になり、また仕切り直しとなる事がよく起こります。利用者、家族にとっても不安な事と思います。昨今福祉人材不足が叫ばれている中、如何に職員に永く勤めて貰うかに何処も悩まれている事と思います。

今年度「福祉・介護事業所認証制度」ができ、我が法人内でも既に多くの施設が認証を受けていますが、当施設も早々申請を行い認証を受けました。業務内容から新任職員を受け入れる事は無いと思いますが、研修体制・人材育成・キャリアパス・福利厚生等を再確認、整備することができました。やりがいのある仕事、働きやすい職場であることで、一人ひとりが技術、知識を向上させ、利用者から信頼されるケアマネジャーをめざしています。

梅寿荘デイセンター

嵐も吹けば雨も降ったこの一年

センター長
森本　公子

今年度を振り返ってみて思うことは「終わり良ければすべてよし」の一言に尽きます。

長年勤めてくれていた職員の退職など、例年になく悩ましいことが次々起こり、俗にいう負のスパイラルというものに、はまってしまいました。目が回るほど忙しい業務を空元気だけで乗り切っていたように思います。

人がいないことで職員もまた、疲弊していました。それでも、サービスの質を落として、ご利用者に迷惑をかけないようにと奮闘してくれました。

今は新たな仲間も増え、平穏を取り戻しています。なにより嬉しいのは立てた計画に向けて皆が積極的に取り組んでくれていることです。
しんどかった時期を愚痴もこぼさず頑張ってくれた職員に感謝の言葉しかありません。

また、辞めていった職員さんにも、あんなことも、こんなことも、してくれていたのだと感謝の気持ちで一杯です。そして新たな仲間にも新しい風を吹かせてくれたことに感謝です。

デイセンター寿楽

この１年

センター長
伊藤　智宣

年齢を重ねるごとに、日が過ぎるのが早く感じます。長年在籍をしていた職員の異動もあり、この一年は、平穏無事にと願い、昨年と同様でと思いながら、スタートをしました。その甲斐あってか、大きな事故もなく無事に過ぎようとしています。

私は、平穏無事そして昨年同様で、その間に何か考えようと思っていました。しかし、寿楽の職員は、大枠は昨年同様かもしれませんが、小さなことを少しずつ変えていってくれていました。感謝です。経験の浅い職員が多く在籍していますが、各々が不得手を補いながら、ご利用者のケアをしてくれていました。また、年度途中でしたが、新たな意気込みを持ち経験豊富な職員の異動がありました。今までの寿楽にはない考え方・目線で、新しい風を入れてくれています。職員の知恵と知識で、今までの寿楽とは違う寿楽になるのではないかと、思います。
今考えてみると、私自身は構えの姿勢で４月を迎えましたが、職員一人ひとりは目標を持ち業務をしていてくれたからこそ、平穏無事にこの一年を終えられるのだと、感じています。

特養・養護　梅寿荘

梅寿荘の今年度

特養次長・養護施設長
松岡　利和

年度の初めに特殊浴槽を新しく導入しました。現建物は15年目を迎え、設備や備品の消耗が目立つようになった象徴ですが、この他にも、配管設備の中規模な改修工事、照明のLED化などを実施しました。特養は要介護３以上の入所条件のためか、利用者の重度化が全体的に表れています。これに対応するためにも、施設内の勉強会に都合３名の外部講師をお招きし、専門分野の研鑽に取り組みました。介護報酬の改定を控える年で、自立支援や医療対応などをテーマに介護の提供を整える一貫でもあります。介護業界の人材不足の現状に対しても打開策を検討し、人材確保の対策を実施しました。

何とも課題の多い年であります。他にも、養護の在り方、地域貢献、社会福祉法の改正、メンタルヘルス、災害対策など枚挙にいとまがありません。どれも簡単に終結するわけではなく、これからも継続するものばかりです。考えるべきことが多すぎて滅入ってしまうところを何とか奮い立って肯定的に捉えると、これらの課題の多さは、施設の存在が広く認知されていて、社会からの期待やニーズが非常に顕在化してきたとも言えます。「福祉施設にはこう在って欲しい」という具体的な要望に応えていく時代のように感じます。利用者一人ひとりに喜んでもらう従来の福祉施設像に加えて、社会全体に喜ばれる新たな福祉施設像を描いて、今の課題に前向きに取り組んでいるところです。

デイセンター憩の家

皆で作るデイセンター

主任生活相談員
友國　和之

このたびの研究発表でのポスターセッションでは、「介護ロス症候群を予防するためにデイセンターとして何ができる事」をテーマに、認知症介護を終結されてからその介護者がどのように過ごされているかという事を５年間さかのぼり憩の家を中止されたご家族にアンケートを取らせていただき、今までに家族の認知症介護のために目一杯愛情を注がれたその対象者が亡くなられたときに、その介護者が責任や生きがい・使命感がやがて喪失感に変わり社会から取り残され、閉じこもりがちになってしまい要介護状態になる事を早めてはいないかという事が今回の内容となりました。

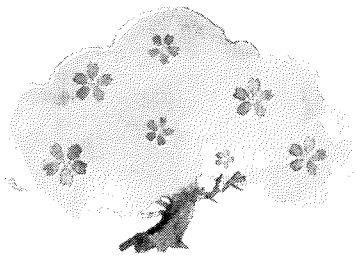
これらの活動は１年間ではなく、今まで関係して下さった要介護者と家族様との関係の中、憩の家の活動として交流会などで家族様同士が集まり、家族様同士のつながりができて「あの人今どないしてはるやろ？」のお声から自然発生的に出来上がったテーマでもありました。またご利用者の担当ケアマネージャーも家族支援の出来るデイセンターだという事を他のご家族にもご案内してくださり、今まで私達が積み重ねて来た事を認めてくださった気がしました。

ただ、私達にとってはご家族に相談させていただくこともあり、心の支えになっていることもしばしばあります。これからも枠にとらわれることなくチームがひとつになってお互いが支えあうことができる「皆で作るデイセンター」である事を目指します。

あくなみ苑

一年を通して

ケアハウス施設長
田中　将史



今年度も全ての事業が計画通りとは行きませんでしたが、事業計画で書いた大きな事については、ほぼ計画通りにできたように思います。特に例年、７月に実施していた夏祭りを日程変更し、10月に秋祭りとして行ったことと、介護ロボット導入委員会を立ち上げ、ベッドから車椅子への移乗介助が二人の介助者で行わなといけないご利用者に対し、一人でも行える介護ロボットを導入した事です。このロボットの導入過程が人材不足の解消に繋がるとして介護労働安定センターから高く評価された事も嬉しかったです。

さて新しい職員もたくさん入ってきてくれました。職場内が活気に満ち溢れています。それぞれの立場や部署を越えて色々な意見が飛び交っています。みんなの想いや考えが少しでも実現できるよう、まずはしっかりと計画を立てて、予算をつけなければ…

デイセンター延寿

介護予防・日常生活支援総合事業に関わって

主任生活相談員
井上　貴至

平成29年4月から全国の自治体で取り組むこととなった介護予防・日常生活支援総合事業いわゆる総合事業とは、地域の実情に応じて、地域の高齢者の方を対象に心身の状態、介護予防の必要性や生活面の支援に対して、ボランティア・地域住民の方や様々な団体が参画し、多様なサービスを提供する事業です。

デイセンター延寿では、デイサービス利用が対象外の要支援認定者・要支援認定相当者が利用できる介護予防・生活支援サービス事業と、65歳以上の方が利用できる一般介護予防事業から生駒市の委託を受け、総合事業で内容が異なる3種類の予防教室を実施しています。介護保険制度の普及により、福祉サービスは飛躍的な発展を遂げたといえます。しかし、制度の問題上で公的な福祉サービスだけでは、対応しきれない様々な課題も存在します。この課題を解決し、きめ細やかなサービスの提供を行うには、ボランティア・地域住民の方と福祉専門職がそれぞれの分野で共に支え合う関係の構築が必要不可欠と考えます。高齢者の方が、あたりまえに生活を営むことが可能となる地域社会を創りだすために、今後も懇切丁寧をモットーに介護予防事業を継続していきたいです。

※総合事業のお申し込み・お問い合わせは、生駒市役所　地域包括ケア推進課またはお近くの地域包括支援センターまで

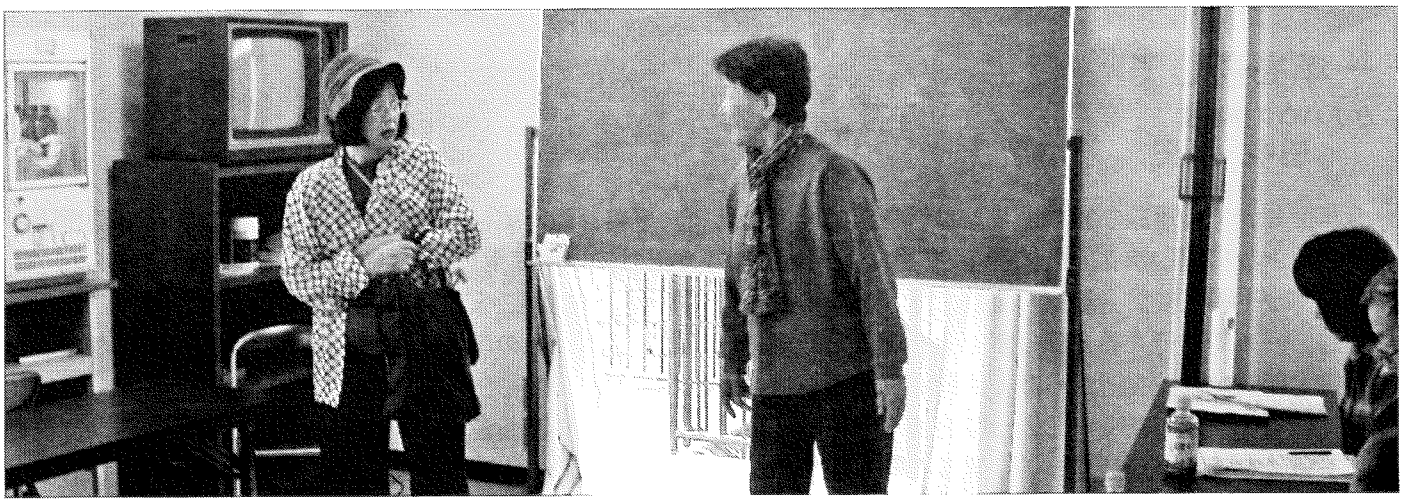
生駒市梅寿荘地域包括支援センター

認知症に関する取り組み

センター長
岩井香奈子

平成29年度は認知症に関する取り組みを、市と共に事業の重点策の一つとして置きました。認知症地域支援推進員を中心に、認知症の正しい理解と知識の普及のために、認知症サポーター養成講座を自治会や金融機関、薬局などで開催し、地域住民以外に商業施設の窓口対応の方々にも理解を深めていただきました。元町２丁目自治会では講座の後に、住民と共に地域のデイサービス、居宅介護支援事業所、特別養護老人ホーム等のスタッフも積極的に参加していただき、徘徊高齢者に対する声かけや保護の模擬訓練を実施することが出来ました。今後も認知症の方を含む高齢者にやさしい地域づくりについて、皆で共に考える機会を持てるよう各地域で進めていきたいと思います。その他認知症に関する相談や、認知症高齢者と家族を支える支援体制の充実に関する取り組みとして、総合支援センターあずさを含む市内２箇所の認知症カフェの利用を、市内地域包括支援センターと声をかけ合いながら、支援が必要な方に情報が届くよう継続して推進していきます。

次年度は、これらの支援が充実したと住民の皆様に実感していただけるよう、具体的な計画を立てて実施して行きたいと思います。



徘徊高齢者模擬訓練　接し方について学んでいただく

奈良県発達障害支援センター
でぃあー

事業を通して振り返る出会いの一年

相談員
平田小百合

奈良県発達障害支援センターでぃあーでは、発達障害のある方、およびその疑いのある方が、よりよい生活を送ることができるよう、ご本人やご家族、支援者を含めて支援しています。その一貫として、平成27年度からペアレントメンターの養成・派遣事業（発達障害者家族支援体制整備事業）に取り組んできました。

ペアレントメンターとは、発達の気になる子どもを持つ親として、同じような子どもを育てる親の悩みを聞いたり、経験談や地域の情報を教えたりしてくれる保護者を指します。具体的な活動としては、先輩保護者として保護者向けサロンや勉強会で子育て体験談をお話頂き、発達の気になる子どもとの関わりに悩む保護者を元気づけたり、支援者向けの研修で保護者としての体験や視点をお伝え頂いたりすることが多いです。現在は、ペアレントメンターを養成し地域へ派遣するコーディネーターの役割を、でぃあーが担っています。

事業を通して出会ったペアレントメンターを志す保護者の方々は、地域や仲間の保護者のために活動したい！という思いを持つバイタリティー溢れる人達でした。そんなペアレントメンターが語る、お子様と向き合ってこられた思いの詰まった体験談は、コーディネーターの立場でも何度聞いても心に響くものがあります。そのお話を、悩んでおられる保護者や、その方々を支援する支援者にお繋ぎし、話を聞けて良かった！という反響を頂くと、とても嬉しく思います。

もう一つは、ペアレントメンターの派遣依頼を頂く支援者の方々との出会いです。ご依頼を頂くと、一緒に企画を検討し、時にはイベント当日も一緒にお手伝いさせて頂くのですが、そのやりとりを通して出会い、今後も顔のわかる関係として繋がることができることは、非常に学び多く貴重な機会だと感じます。

事業を進めさせて頂くに辺り、ペアレントメンターを始め、ご依頼・ご協力頂いている法人内外の関係者の方々には本当に感謝の思いです。まだまだ運営方針やペアレントメンターのフォローアップなど、課題が尽きることはありませんが、来年度もより一層拡げていくことができれば幸いです。

児童施設より

いこま乳児院

一年を振り返って

院長
辻村万里子

昨年の８月に新しい社会的養育ビジョンが示され、「乳児院」が無くなってしまうという風評が流れて、少なくとも施設に働く職員の間に激震が走りました。家庭養育優先の理念に基づき、実親の養育が困難な場合は代替養育として施設より里親だと。その里親委託率を75％にという数値目標として掲げられたのです。いきなりの報道に現場は取り残された感があり、施設は否定されたという思いが胸を突きあげました。勿論家庭養育が望ましいことは言うまでもないことなのですが、事情は様々でそれが適わない子もまだまだ居るのが現状です。常に乳児院では、児童相談所と連携を取り、養育困難児も個々の事情に柔軟に対応して一人ひとりの子どもたちの養育に携わってきました。

折しも今年度はいこま乳児院創設50周年を迎えました。この先「乳児院」は必要無しという社会が来るように、乳児院の在り方を見直す時に来ているのでしょう。院長としては、その方向を見間違わないようにしっかりと見定めていかなければと身の引き締まる思いの一年でした。

新年の祝膳をみんな揃っていただきます

愛染寮

新しい社会的養育ビジョン ～数値に振り回されることなく…

寮長
末松　保喜

この１年を振り返る―なんといっても夏に唐突に国が発表した「７年以内に就学前の子どもの里親委託率を75％にする。就学後の児童も10年以内に50％をめざす。」という寝耳に水のような数値目標に現場は相当混乱したという現状が重大ニュースNo.１であろう。

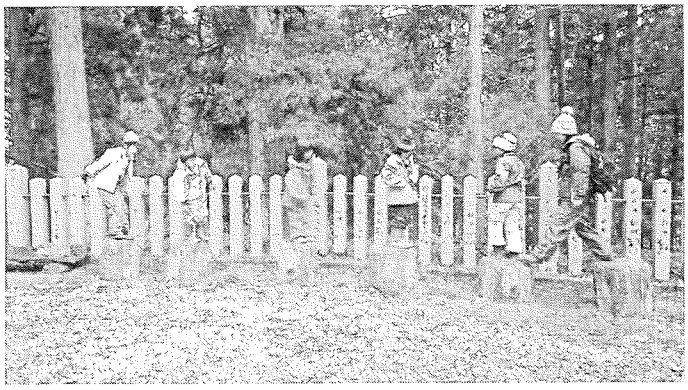
一昨年成立した改正児童福祉法の「家庭と同じ環境での養育の推進」という理念からすれば、方向性としては間違ってはいない。ただ奈良県で言えば16％程度の委託率の現状、そして施設不要論とも思えるその強い口調に現場が大きくショックを受けたことは確かである。

愛染寮の職員にはこう伝えた。「私達の今までしてきたことが問われ、そしてこれからどうするのかも問われている。ただ、右往左往する必要はないが、開き直る必要もない。今なすことをなすのみ。ただ、これでええんやとも思わないでおこう。」いや、実際それしかありません。自分たちの船のオールを、他人に任せるからこんなことになる。あれ、どっかの歌にこんな歌詞があったけ。

精神科の偉い先生や児童相談所の所長さんはあくまで施設側の人間ではないはずなのに、いつのまにやら主導権を握られてしまっていた。我が手にオールを取り戻しましょう。

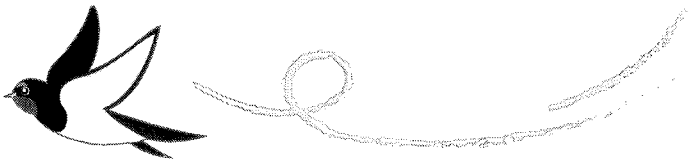
さて愛染寮は安定したという表現はおかしいかもしれないが、入所人員もトントンと増えて行き、満床になった。やはり、それだけその必要性があるのだろう。出入りも激しい。これが実情です。

恒例生駒１団のとんどに、自治会の方も来てくださいました。



全く雪のなかった今年の金剛登山

児童発達支援 いっぽ



三平二積（さんぺいじしゃく）

児童発達管理責任者
長野　智子

小さな事業所、少ない職員数、日替わりに来る子供たち、の環境で何か大きな行事がある訳でなく、大きな変化がある訳ではありませんが、振り返ると今年度も小さな変化はやはり、ありました。①新しい職員が２人仲間入りしてくれ、以前からいる職員は教え、伝えそして、一緒にやっていこう！と力を合わせてくれました。②作業療法士の先生が月１回、スーパーバイズで来て下さるようになり、子どもへの新たな見立てを教わりました。③音楽療法やペアレントトレーニングをいっぽの柱の１つにしていこうと、皆で勉強するようになりました。④プレミアムフライデーの日に、早くは帰れないが、絶対定時で帰る日!!を作ってみました。（難しい!!）花となり実となるには時間がかかるかもしれません。私は、今年の年頭連絡会の宿題で、「三平二積（さんぺいじしゃく）」という四字熟語を作りました。「十分ではないが、少しのもの、小さい事を積み重ね心穏やかに過ごす事。」この言葉を日々の中心に置きながら、根の張った、ブレない事業所になればいいな、と思っています。

こども支援センター
あすなろ

小さな声・・・大切に

センター長
大西　清司

毎年２月に入ると１年を振り返り、次年度にむけての見直しのアンケートをもとにチーフ会を実施しています。同じクラスであってもこども達の発達課題の幅も広く、「ねらいに沿った保育内容を吟味してクラス運営を行うことは難しかった」と、いつも課題にあがります。年齢やこどもの持つ特性等を考慮して、クラス編成をしても、こども達は日々成長し、また新年度はこども達も新たにあすなろに通われます。もうこれは職員の経験値と力量が問われます。チーフ会を終えて、ふと思ったことは、せっかくあすなろに通われているのであれば、通われているからこそ、いろいろな体験ができて、その体験がこども自身の自信につながれば尚良しということです。それと職員すべてが同じ方向を向いていない事があっても、それはそれで大切な気もします。多種多様な意見や提案それに少数の小さな声が、混ざり合って次第に最も大切な方向が見つかり、ひとつになっていくように感じられます。これまでも小さな声の中に非常に貴重な要素を含んでいることが多くありましたが、見逃してきたことも多くこれは私の反省の点です。この１年、職員もこども達と一緒に小さな一歩を歩んできました。歩幅が少し広い分だけやはり大人はこども達の先生なのです。今日も支援について頭を悩まし、苦しんでいるまじめな職員がいる限り、明るい展望が見えてきます。来年度も頑張りましょう。

あすかの保育園

地域とのふれあいを大切に

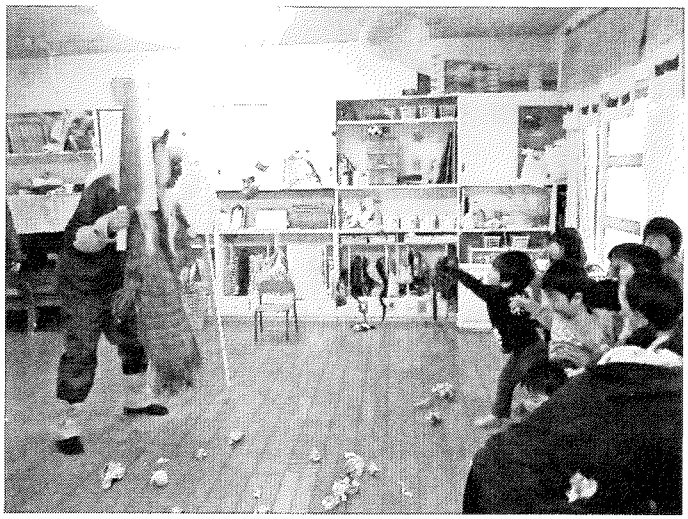
園長
岩本登美子

今年度は、子どもも保護者も職員も笑顔で過ごせる環境づくりをめざして歩んできました。そのために大切にしたのは、リーダー会議です。

リーダー会議には主任保育士、幼児クラスと乳児クラスのチーフリーダー、園長が参加します。この話し合いを基にこれからの方向性を決めていきます。
保育園で一人ひとりの職員の良さが発揮できる環境を作るためにもリーダー会議で情報を共有し、共通理解しながら丁寧に対応することが大切さだと感じた1年でした。
園長の役割は、子どもと保護者、保育者を信頼し、考えに耳を傾けて共感し、響き合いながら保育園を作ることだと思います。

保育園はいろいろな職種の職員が専門性を活かしながら子どもの生活を守る場です。ですから、職員からの発信を見逃さないようにしたいと思っています。いつも子どもたちに温かいまなざしを向けている保育者が側にいると子どもたちだけでなく保護者も心が穏やかになります。私もそんな姿を見て心が温かくなります。

保育園は来年度から新保育指針の元、保育が行われます。新しく取り入れていくものと、これまでの保育で受け継いでいくものを土台に据えて、より良い環境を提供できる保育園を目指していきたいと思います。

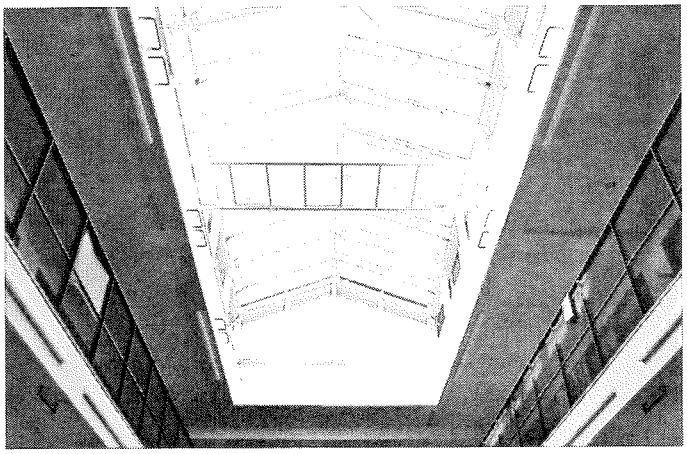

あすかの保育園

いこまこども園

一年が終わろうとしています

園長
米田恵美子

立春を迎えたものの、園庭の木々は厳しかった寒さを表すかのようにすべて葉を落としたままです。その中に一本だけ青々と葉を付けたユズリハの木があります。春、枝先に若葉が出たあとに前年の葉がそれに譲るように落葉することから、その様子を親が子を育て家が代々続いていくように見立て、縁起物とされています。同じく62年間続いた、いこま保育園が多様な時代のニーズに対応するため、いこまこども園へと変わりました。また、12月には老朽化したトップライトの改修工事を終え、風通しの良い快適な構造になりました。さらに来年度には、国の「子育て安心プラン」にあげられる生駒市待機児対策として、定員増員による施設整備も控えています。それに伴い、ますます保育の受け皿拡大を支える「保育人材確保」が大きな課題となります。


改修されたトップライト

３月を迎えいよいよ年度の終盤です。園を代表する年長児の背を見て、年中児が育ってくれていることや、各年齢の子どもたちが、日々いろいろなことにチャレンジしながら成長し、その年齢の顔となっていることを大いに感じさせてくれます。さて、こども園初年度もあとわずかです。それぞれの年齢において、ユズリハのような素敵なバトンタッチが見られることを楽しみに子どもたちの成長を見守りたいと思います。
最後に、こども園開園にあたりお心を寄せていただきました皆様に、心より感謝申し上げます。

極楽坊保育園

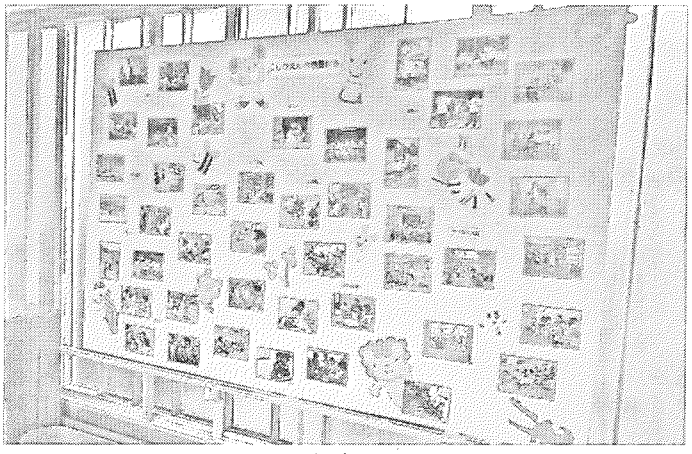
公開保育に向けて進んでいます

園長
松村　善子

来年度行われる公開保育に向け、準備の年度となりました。毎年春からテーマをもって取り組む作品展の計画に、今年度各年齢で「紙」をテーマに、様々な感覚や表現を楽しみながら遊びの世界を広げ、形（造形）にしていく内容を加えた作品作りに取り組みました。

紙の特性を生かして破いたり、ねじったり、丸めたり、つなげたり・・・たくさんの経験やいつもと違った体験をしました。保育士たちは、「楽しい、面白い」「もっとやってみたい」と、目をきらきらさせながら遊びこむ子どもたちの姿に共感しながら、出会っている素材の中に隠れていた不思議さに気づかされたり扱い方の難しさを感じたりするなど、子どもたちと一緒に多くの学びを得た年度になりました。また園内研修を重ねながら、園外研修や他の保育園見学に、園の公開保育を意識して参加したことで、園内では気づけなかった保育内容や環境づくりなど様々な課題がまだまだあることに気づかされたり、教えられたりしています。いくつかの課題を私たちの保育の中に、どのように取り組んでいくのか来年度に向け話し合いを続けながら、子どもたちだけでなく保育士たちも「表現することが楽しい」経験がたくさんできる公開保育になるように、計画を進めていこうと思います。

みんなで秘密基地つくるよ



仔鹿園

仔鹿園

春夏秋冬

主任
稲田　桂子

「うわ～　楽しそう!!」

奈良仔鹿園の中の仔鹿園（毎日通園）だけでも年間50人以上の方が入園を検討するため見学に来られ、廊下に掲げられている春夏秋冬とタイトルのついた写真パネルを見たほとんどの方がこのように言ってくださいます。

入園式でお母さんにしがみついて泣いている顔、プール遊びではじける笑顔、運動会で自信に満ちて競技する顔、落ち葉遊びでお友達をのぞき込む顔、クリスマス会で得意げに踊る顔、この１年も子ども達は成長、発達の中で色んな表情を見せてくれました。

写真は一瞬を切り取ったものですが、その中には子どもの頑張りや葛藤、ご家族の愛情や時には涙、職員の工夫や情熱など、それまでのすべてのものが映し出されているように思います。

楽しさの中で療育ができることは40年間変わらず保護者の願いであり、職員の課題ではないでしょうか。乳幼児にとって、また発達に心配のある子どもにとって、この「1年」の重みをあらためて心に留めたいと思います。

「楽しそうでしょう！」仔鹿園は「楽しいですよ!!」これまでも、これからも…

平城児童センター

赤膚焼き陶芸体験
～白釉に透ける暖かさにふれて!!

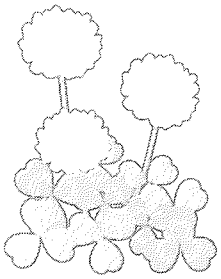
センター長
徂徠おさむ

センターでは毎年奈良の伝統芸能に触れる体験をしていますが、一月十四日に大和郡山市の赤膚焼き窯元小川二楽を訪ねて陶芸体験を行いました。

赤膚焼きは乳白色の柔らかい風合いが特徴とのことで、花瓶、茶わん、湯飲み、置物なだの多様な作品が作られています。

体験では先生に赤膚焼きの歴史や作り方の説明を聞いてから子どもたちはお互いに「何を作るの」などと話をしながら何を作ろうかと考え取りかかりました。最初に丸い輪を作り徐々に大きくしながら進めていき何回も作ってはやり直しました。出来上がるにつれて細部を整え表面を指でならして途中では先生に教えてもらいながら二時間程度で作品を仕上げていきました。これから窯で焼いてもらって三月中旬に数多くの名器、名椀ができる期待しています。今後とも様々な伝統芸能を体験していきたいと思います。

名器を作ります



いこま乳児保育園

地域とのふれあいを大切に

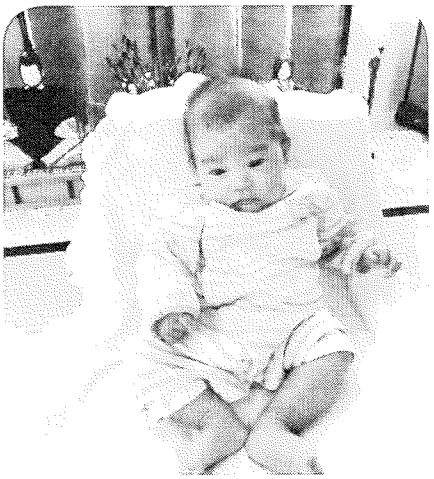
園長
家治　圭子

法人の敷地内に梅寿荘デイセンターがあり、乳児保育園の子どもたちのお散歩コース内には、地域支援室もあります。以前からお外より「おはよう。行ってきます。」と気軽に声をかけてでかけます。また、帰ってくるときも「ばいばい」と手を振り声かけています。2歳児はここ3～4年前より年1～2回ぐらい交流をもたせてもらっています。偶にいくので、子どもたちの表情も硬く職員よりなかなか離れませんでしたが、今年は行事のある事に交流を持ち回数も多くなるとおじいちゃんやおばあちゃんはもちろんのこと子どもたちにもにこやかな顔が見られ手遊びや握手も出来るようになりました。また、子どもたち同士で「おじいちゃんおばあちゃんとこ行ったなぁ。～したなぁ。」とお話しも弾みます。

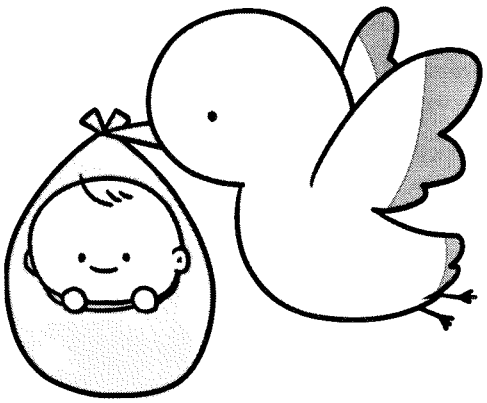
今核家族が多い中、色々な人たちとの出会いを大切にし、2歳児ではなかなかできない経験を沢山させてあげたいと思います。

いっしょってたのしいね

Happy♡ Happy♡ news



辻村泰聡、恵理ご夫妻に長女、
怜愛(れいな)ちゃん誕生！
12月生まれの射手座です。
どうぞよろしくおねがいします♡



法人年頭連絡会を終えて

主任介護支援専門員　中田エミ子
主任サービス提供責任者　王利　美保

さて、平成30年1月20日（土）「平成30年宝山寺福祉事業団　年頭連絡会」が行われました。

今年は、総合福祉施設やすらぎの杜延寿が進行役を担当させて頂きましたのでご報告します。

今年の年頭連絡会は辻村理事長のご訓辞「先人に学ぶ～福祉の実践者達～」昨秋の叙勲で辻村理事長が「瑞宝双光章」をご受章されたお祝いの会・交流会・参加者全員（92人）による「なんちゃって四字熟語」投票・発表という3つのテーマで進めてまいりました。

理事長のご訓辞「先人に学ぶ～福祉の実践者達～」では、現在の宝山寺福祉事業団の原点をお話下さいました。日本書紀巻第14に記載されていた、『天皇は后妃に桑を植えさせて蚕をかわせることを思い立ち、それを命じられたスガルは蚕（コ）と児（コ）をカン違いしたことで、人の子を養うことになった』という内容が書かれていたそうで、そこから児童養護施設や乳児院の原型が出来たのではないかと思われるなど、どの歴史を紐解いても福祉につながる原点が有ったことをお話され、この世に生をもつ人間には福祉の道を志すDNAが刻まれているのだと感じました。

ご訓辞に引き続いて、辻村理事長「瑞宝双光章」受章祝賀の席へと移りました。『理事長の足跡』と題して各施設・事業所から理事長との思い出の写真を上映いたしました。写真は昭和24年極楽院保育所創設から始まり各施設創設とともに振り返る、理事長の懐かしい場面が収められていました。つづいて、各施設・事業所より「瑞宝双光章」ご受章お祝いのメッセージ動画が上映されました。それぞれ、思考を凝らして作って頂き心温まるメッセージが届きました。

後半の交流会では、参加者全員による新年の抱負を『なんちゃって四字熟語』で事前に創作して頂いた作品の中から、出来栄えの良い作品を1票選び投票してもらいました。真剣に考えて下さった方もそうでない方も、色々な四字熟語が出て楽しんで頂けたのではないでしょうか。正直同じ熟語が出るのではないかと思っていましたが、92人・92通りの四字熟語が出来ました。

ここで1～3位までをご紹介します。

1位：招福初孫（しょうふくういまご）
仔鹿園：加藤めぐみさん
待望の初孫は大きな「福」を家族に招いてくれました。「招き猫」ならぬ「招き孫」

2位：弱妻強旦（じゃくさいきょうだん）
デイセンター寿楽：伊藤智宣センター長
妻より強い旦那になりたい。永遠にわが家は、弱旦強妻かもしれません。でも、決してわが家は、恐妻ではないのです。愛おしい妻です。

3位：笑周利貴（しょうしゅうりき）
あすかの保育園：小林美香さん
（某CM～♪になぞらえて歌いながら!?お読みください）周りの人たちが笑ってすごせるように、自分を高められるような一年になるように。

最後に、年頭連絡会は研修の場であり、共有する場であります。

～先人に学ぶ～より時代背景やその環境は大きく変わった。しかし、福祉の道を志した人々には何か同じ根のようなものがあるような気がする。その道を歩み続けさせる何か我々をゆさぶり駆り立てる“ある力”といったものが、我々の背中を押しているのではないだろうか。

「興法利生」の精神に基づき、初心を忘れず”手間暇惜しまず丁寧に“今年も精一杯頑張ります。

第21回 法人研究発表会

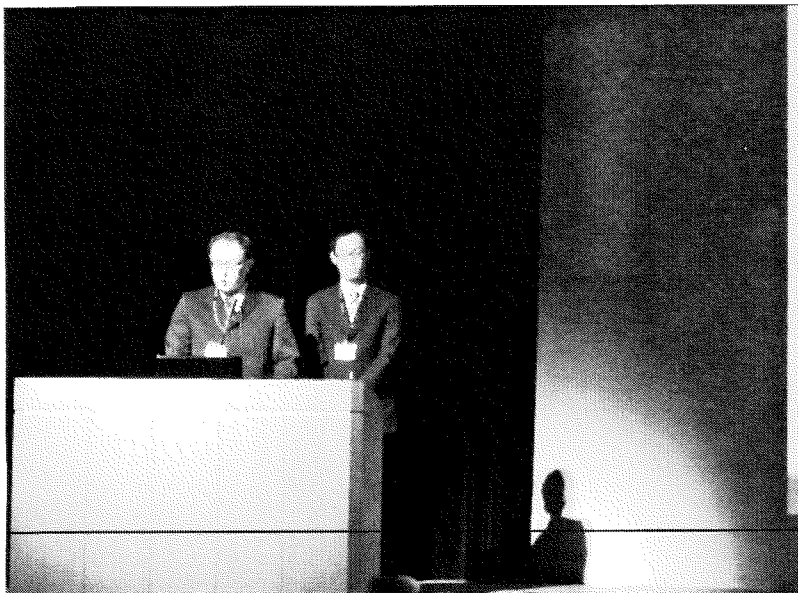
生駒市梅寿荘地域包括支援センター　若井香奈子

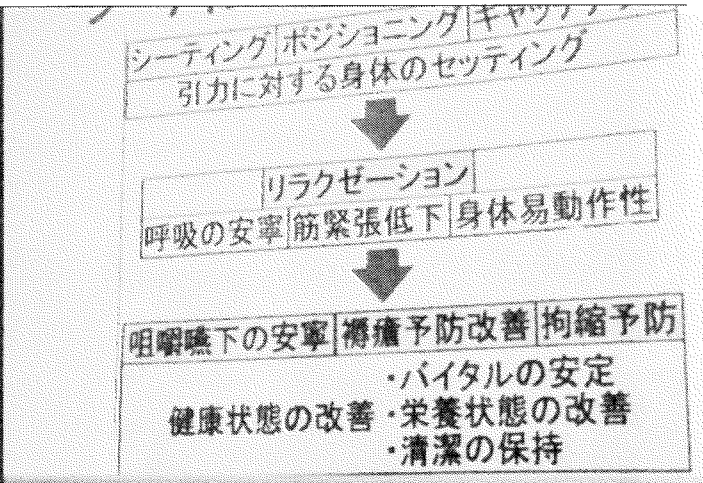
平成30年1月28日に生駒市南コミュニティセンターせせらぎにて、第21回研究発表会を開催いたしました。

今年度は、「私たちの介護」を大会テーマとして、高齢者部門3施設からの発表と法人各施設が取り組んでいる業務内容・業務改善をポスター形式で発表して多くの方々にご覧いただきました。第2部の講演会では、健康運動指導士の「らくらく体操から17年」と題して、健康運動指導士の大谷恵子先生から講演していただきました。

発表1は、養護老人ホーム梅寿荘の『自立と活動につなげる環境作り』と題して、入所施設の供用スペースを再構築する取り組みの発表をいたしました。養護老人ホームは、市町村からの措置により入所し、特別養護老人ホームと違い、自立度が高く保たれている方も多く入所されている施設です。梅寿荘の養護老人ホームは、全室が個室となっており、自室に閉じこもるご利用者もおられ、個室型施設の課題である、共用空間の再構築を図り、自室から出てくる時間の増加と、高齢者自身が行う動作・活動の増加を目的に取り組んだ内容でした。自室から出てもらえるために、居心地のいい環境作りとして、1か所の食堂を自立度の高い方用に第二食堂を設けたり、メイン食堂も適度な死角や装飾品を増やすなどして、過ごしやすい雰囲気を作ったり、第二食堂を設けることによりメイン食堂にできた余剰空間にくつろぎスペースを設けたりすることで、入居高齢者が共用スペースである食堂で過ごされる方が増え、第二食堂で食事をされる入居高齢者は自立性が高まり、協調性が形成されたとの報告でした。

発表2は、特別養護老人ホーム延寿の『安楽の姿勢を作ることによる生活の変化』と題して、利用者の椅子に座った姿勢や寝ている姿勢を整えることで、身体的・精神的苦痛が軽減する取り組みの発表でした。〝シーティングとは、椅子に座った姿勢を適切な状態に整えること。ポジショニングとは、寝ている姿勢を適切な姿勢に整えること〟と言われており、別々の技法として考えられています。延寿では別々の技法ではなく、〝引力に対する身体のセッティングとして同じ技法〟と捉え、2016年にシーティング委員会を発足し、委員会が中心となりケアを提供しています。今回は、1名の事例をもとにして、その効果について検証した内容でした。対象のご利用者は、座位時の不安定さと傾き、強い拘縮などがありましたが、現状を





把握しながら、新たなシーティングとポジショニングを検討しました。適切なシーティング・ポジショニングを提供し、ご家族のご協力も得ながら適切な用品を揃えることで、座位時の安定・拘縮のほぐれなど安楽な姿勢が作ることができたとの内容でした。発表では、発表者の実演やご利用者の動画を流すことで、分かりやすく報告をしていました。このシーティング・ポジショニングは、特養だけなく、在宅生活をしている高齢者にとっても重要なことだとも感じました。

発表3は、老人総合福祉施設あくなみ苑の『介護ロボット導入による介護現場の未来』と題して、介護ロボット導入委員会を立ち上げ、委員会メンバーを中心に検討・導入をした発表でした。数多くの介護ロボットがありますが、数機のロボットのデモンストレーションやレンタルをして、実際に導入する前に体験を行っていました。体験を行うことで、パンフレットなどではわからなかった問題点などの検証、委員以外の職員からのアンケートを通じて、リクライニング型車椅子に変形をするベッドを導入する内容でした。導入前のアンケートでは、介護ロボットに対してネガティブな職員が多かったが、導入後のアンケートでは、好意的な印象を持つことスタッフが多くなったようです。また、動画も流すことで、導入機の操作方法の説明を行い、介護ロボットを導入の検討することもサービス提供の一つだと感じる報告でした。

また、ポスター発表では、サービス・処遇向上、業務改善、地域連携などの様々な取り組みを18の発表があり、興味深く、日々の業務の中での努力の積み重ねや成果がうかがえ、部門を問わず参考になるものでした。

講評では、種智院大学人文学部長佐伯俊源教授にお願いをし、業務の忙しい中の発表資料の作成の労をねぎらうお言葉をいただき、発表については、具体的なお話を通じて今後の取り組みに行かせるヒントなどをいただきました。

第二部の講演では、17年前に法人の地域貢献の一環として"らくらく体操"を作成したときにご指導、そして制作したビデオに登場していただいた健康運動指導士の大谷恵子先生にお願いをしました。大谷先生は、17年前と変わらず、きびきびとした動きとはつらつとしたお声で、体操の楽しさだけでなく、来場者と一緒に歌いながら体操を行い、体操を行う時の心がけなどのお話を織り交えて、ご講演いただきました。来場者よりも「楽しく体を動かせた」「もっとお話を聞いていたかった」など、好評なご意見も多く、楽しい一時間となりました。

次回は、児童部門が研究発表をしたします。どうぞご期待ください。

全国表彰

平成29年度 法人永年勤続表彰

添野　陽子　いこま乳児保育園・保育士・20年

龍田　千夏　いこま乳児保育園・保育士・20年

城山　裕恵　いこま乳児保育園・保育士・20年

黒川　美穂　梅寿荘・介護支援専門員・20年

岡本　史　仔鹿園・保育士・20年

中井　加苗　こども支援センターあすなろあずさ・センター長・25年

大西　清司　こども支援センターあすなろ・センター長・35年

尾植　初美　いこま乳児保育園・保育士・35年

全国レベル表彰受賞

○瑞宝双光章
辻村　泰範　梅寿荘・施設長

○厚生労働大臣表彰
井上　太　延寿・施設長

○厚生労働大臣表彰
辻村　万里子　いこま乳児院・院長

○厚生労働大臣表彰
前田　紀美子　極楽坊保育園・保育士

○全国社会福祉協議会会長表彰
中井　加苗　こども支援センターあすなろあずさ・センター長

○全国老人福祉施設協議会表彰
田中　将史　あくなみ苑・施設長

○全国老人福祉施設協議会表彰
岩田　一哉　あくなみ苑・介護職員

○全国老人福祉施設協議会表彰
中村　達史　あくなみ苑・介護職員

○全国老人福祉施設協議会表彰
黒川　美穂　梅寿荘・介護支援専門員

○全国老人福祉施設協議会感謝状
小河　良　特別養護老人ホーム延寿・主任生活相談員

○全国老人福祉施設協議会感謝状
遠藤　光子　特別養護老人ホーム延寿・機能訓練士

○全国老人福祉施設協議会感謝状
川上喜代美　居宅介護支援センター延寿・介護支援専門員

○全国老人福祉施設協議会感謝状
森本　公子　梅寿荘デイセンター・センター長

○全国老人福祉施設協議会感謝状
友國　和之　梅寿荘デイセンター・生活相談員

○全国老人福祉施設協議会感謝状
木村　ゆかり　梅寿荘デイセンター・事務員

○全国老人福祉施設協議会感謝状
宮城　秀伯　梅寿荘・介護職員

○全国老人福祉施設協議会感謝状
村上　尚　梅寿荘・介護職員

○全国老人福祉施設協議会感謝状
小森　康志　あくなみ苑・主任生活相談員

○全国老人福祉施設協議会感謝状
辻野　勝久　あくなみ苑・介護主任

○日本保育協会会長表彰
家治　圭子　いこま乳児保育園・園長

○日本保育協会会長表彰
喜多　由希子　いこま乳児保育園・主任

○日本保育協会会長表彰
添野　陽子　いこま乳児保育園・保育士

○日本保育協会会長表彰
龍田　千夏　いこま乳児保育園・保育士

○日本保育協議会会長表彰
喜多　由希子　いこま乳児保育園・主任

厚生労働大臣表彰を受けて

延寿
施設長　井上　太

昨年一〇月に厚生労働大臣表彰の内示が出たとの知らせが届いた。

このような栄誉には縁のないものだと思っていた私は、「俺が？表彰？」と、どこか他人事のようで実感が持てなかった。しかしそうこうしている内に行政の方や社協の方など多くの方に「おめでとう」と声を掛けて頂き、お祝いまでして頂きました。延寿の仲間にもお祝いをして頂きました。何と有難いことか、おこがましいと言う思いと同時に、本当に多くの人に支えられて今があるのだと言うことを実感した日でもありました。思い起こせば三十五年前梅寿荘からその職をスタートしました。まだまだ男性職員の少ない時代、腰の軽い何でも屋と言ったところで重宝だったのかもしれません。しかし専門知識も技術もない私をよくぞ我慢して使って頂けたものだ。

理事長はじめ諸先輩方には随分心配をかけたのだろうと後になって気付き恐縮するのですが、そんな事とは露程も知らない若造の私は、何の根拠もない自信を持って突き進んでいたのだろうと思います。と言うのも梅寿荘では入浴サービスの仕事もさせて頂きました。

その流れで昭和六十三年にはミニデイサービスへの移行にも、更に平成二年桃李館が完成しデイサービスへの移行にも携わらせて頂きました。その他在宅介護支援センターや訪問介護事業、更に訪問入浴事業の立ち上げにも居合わせる事が出来ました。この間目まぐるしい一〇年でもありましたが、楽しい一〇年でもありました。この頃に行政の方や社協の方、また多くの事業者の方との関係が深まり、本当に多くの皆様に支えられてのことだったと痛感します。この頃に備わった考え方がその後の介護保険制度への切り替えを自分の意識の中でスムーズにしたのだろうと思っています。会計基準の変更も重なり準備が大変だったことは言うまでもありませんが、不思議と大変さより楽しさの方が勝っていたように思います。そのままの勢いで翌年には延寿の立ち上げに携わらせて頂くことになるのですが、これがやっぱり一番しんどかったかなって思いながらも、仲間に恵まれ支えられ日々コツコツ積み重ねています。そんな三十五年間と、もうちょっと頑張れとの叱咤激励の受賞だと受け止めています。何れにしても諸先輩方の我慢と多くの仲間の支え無くして今日はないものだと改めて感謝しています。ありがとうございます。

厚生労働大臣表彰を受賞して

いこま乳児院
院長　辻村万里子

法人に就職して、いつの間にか三十年近くが経とうとしています。京都のお寺の娘に生まれ育ち、滝寺に嫁いで四十年。三人の子育て中、丁度平成二年に桃李館が出来たときに事務所のお茶汲みでもと駆り出されたのが、今に至る始まりです。福祉の何たるかも知らない世間知らずの私が、法人の仕事に馴染むまでの悪戦苦闘は当然のこと。梅寿荘に配属となり、一念発起してヘルパー養成講座を受講し、ちょボラ活動に参加して…法人本部の仕事を任されて、乳児院の院長になった時も突然でした。振り返ってみればあっという間。法人の力で私は育てられたのだと本当に感謝しています。中でも、ボランティア精神が私の中に宿ったことが、私の人生を豊かにしている原動力だと思っています。

こんな大きな賞を頂けるというのはとても面映ゆいことですが、先人からの思いを受け継ぎ、これからの法人を担ってくれる若い職員のために、あと少し微力を尽くしたいと意を新たにしています。

厚生労働大臣表彰を振り返って

極楽坊保育園
保育士　前田紀美子

この度、社会福祉事業に永年携わってきたということで、大変ありがたい表彰を頂きました。

初めて極楽坊保育園を訪れたのは、短大二回生の保育園実習でした。一歳児のクラスで手作りのにんじん人形を子どもたちが嬉しそうに見ていたのが昨日のように思い出されます。あの時の感動が忘れられず、入職させていただき、早三十年余りが経ちました。

世間知らずの私を常に気に掛けて下さった代々の園長先生や、迷いながらも子ども達のことを思い、共に歩んで下さった先輩、同僚何よりも毎日笑顔で抱きついてくれる子ども達に支えられ、今日を迎えることができたと思います。私の好きな言葉に「艱難、汝を玉にす」があります。いろいろな困難は、自分が成長するためにある。何とかなる、頑張ろうと私はとらえています。

あっという間に過ぎた日々の中には迷惑をかけ、辞めてしまおうと安易に思ったこともありました。その度に大丈夫大丈夫と温かく励ましていただき、「艱難、汝を玉にす」と反省し、それが知らぬ間に力となり、後輩たちに寄り添えるようになってきました。これは続けて来られたからこそ言えることです。

これからは、私が歩んできた保育の道で、「頑張って長く勤めて良かった。」と思ってくれるような人材育成に努めていかなくてはと思います。

ありがとうございました。

奈良仔鹿園 40周年 お祝いの会

児童発達支援センター 仔鹿園 園長 岡本とも子

昭和52年に奈良仔鹿園が創設され40年が過ぎました。これまでに多くの方々に支えられた月日に感謝を申し上げます。

平成30年2月18日日曜日にお祝いの会を開催致しました。

ご来賓の方々をお迎えし、理事長の挨拶のあと、奈良県福祉部障害福祉課柳原課長から荒井知事のメッセージを代読頂き、中央子ども家庭相談センター笹川所長からもお言葉を頂戴いたしました。

理事長の挨拶では奈良仔鹿園の創設に至るまでのご苦労や想いを来賓の皆様や職員もそれぞれの思いを巡らせ歴史の重みを感じました。

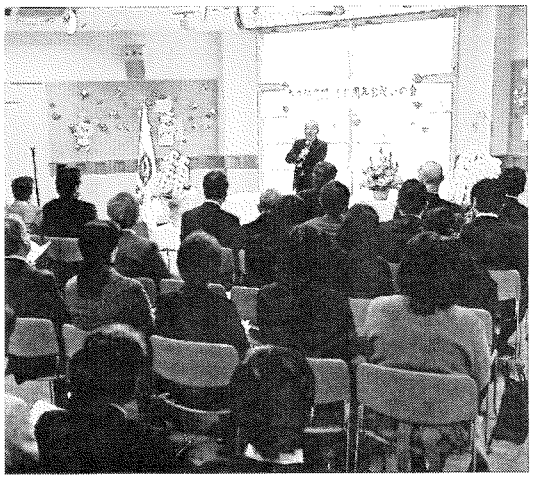
また知事の言葉の中にも奈良仔鹿園が奈良県の障害児療育の先駆者であったことや、障害施策にも大きく関わりを持っている事を評価頂き、たいへん誇らしく思いました。

そして、40年の歩みを少しまとめたものを映像で見て頂き、創設時の奈良仔鹿園の姿と現在の姿を比較しながら年月の長さと移り変わりも感じて頂きました。

法人の理念である「興法利生」の志存興法（志を行動し進んでいく・世の中に広める）念在利生（迷い苦しんでいる人を助ける）この言葉の通りとはまだまだ届きませんが、これからも精進して参ります。

お祝いの会の最後はこの日の午後に開催しました「こじかのひろば」と言う子どもたちの作品展示と職員によるブラックランプ（はらぺこあおむし）を見て頂きました。毎年演目は変わりますが、職員たちが数か月の渡り構想から上演まで取り組んできた成果を見て頂き、初めてご覧いただいた方々からは感動の声を頂き、次への糧と力になりました。

今回ご参加を頂けなかった支援を頂いています皆様にもあらためてお礼を申し上げ、奈良仔鹿園40周年のお祝いの会の報告と致します。ありがとうございました。これからも奈良仔鹿園をご支援くださいますようお願い致します。



平成30年度採用者内定式並びに事前研修

「新しい人とつながり　仕事に向き合う姿勢を学ぶ」

スケージュール
1. 理事長挨拶
2. 研修会趣旨説明
3. 研修
　①「社会人になるにあたって～知っておく心構え～」
講師　いこま乳児保育園　園長　家治圭子
　②「社会人としてのソーシャルメディアの利用について」
講師　人事・研修部長　辻村　泰聡
4. ティータイム
5. 配属先通知
6. 各施設長との懇談

2月23日、桃李館研修室において来年度採用者の内定式並びに事前研修が開催されました。

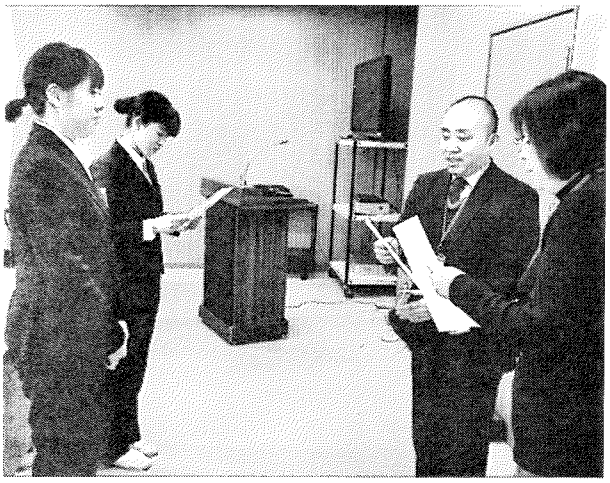
冒頭理事長は、平昌オリンピックで好成績を上げたカーリングやパシュート競技のチーム力を例に挙げ話をしました。また、今日同席した皆は4月から同期の仲間であり、それぞれの配属先が決定の後は、その場所において共に力を出し合い協働して頑張っていただきたい、と挨拶しました。

研修①では、○社会人って？　○何が変わる、何を変える　○参加することでだれもが社会人、目指すは専門職人、の3つの内容の話がありました。終わりには、支援を必要とする人に寄り添い、共に困難を乗り越え、対人援助という奥の深い世界を一緒に進みましょう、と締めくくりました。

研修②では、ソーシャルメディアは種類や仕組み、メリット、デメリットを理解したうえで利用すること。また、個人で使用するソーシャルメディアの利用方法を一つ間違えば情報漏洩になったり、それぞれの職種の法令・規則に触法したりすることにもなりうることを学びました。

その後、同期になるべく仲間で和やかにティータイム。そして、辻村人事・研修部長より一人一人に内定先の通知が手渡され、各施設長との懇談が行われました。

いこまこども園　園長　米田惠美子



RUN伴（ランとも）2017

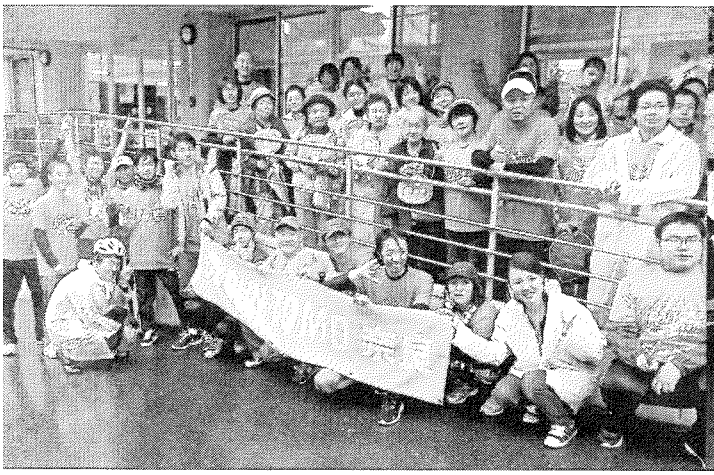
～タスキをつないで～

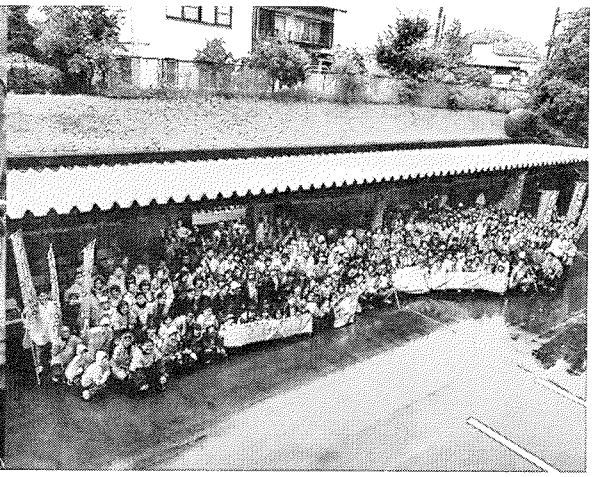
生駒市梅寿荘地域包括支援センター　認知症地域支援推進員　諫山 直子

RUN伴（ランとも）とは認知症の人や家族、支援者、一般の人が少しずつリレーをしながら一つのタスキをつなぎゴールを目指すイベントです。「認知症になっても安心して暮らしていける町」をつくるため、認知症について考える機会となる様、NPO法人認知症フレンドシップクラブが主催しています。今年で7年目を迎えるRUN伴は、日本全国のまちをオレンジ色（認知症の人にやさしい町のテーマカラー）に染める事を目指しています。

10／15(日)あいにくの大雨でしたが、奈良県でもRUN伴が開催されました。宝山寺福祉事業団も、当事者様とご家族様2名、法人内10施設の職員50名でチームを組み参加しました。宝山寺福祉事業団チームは、やすらぎの杜延寿をスタートし、南コミニティセンターを通過、国道168号線を北上し総合支援センターあずさを経由してゴールの市役所までの約7.6キロを、13区画に分けてタスキをつなぎ、ゴールは当事者様とご家族様に飾っていただきました。雨の中でしたが、参加者が一丸となりイベントを盛り上げる事ができたと思います。

来年もより一層、まち全体をオレンジ色に染めることができればと思います。来年は青空の下で走りたいですね。





リーダー研修 第2・3回

人事・研修部長　辻村泰聡

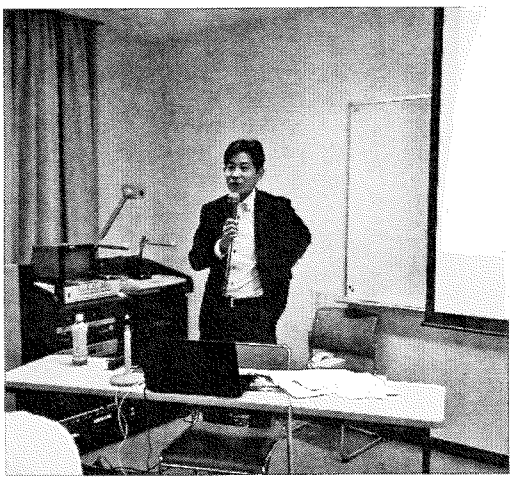
前号でもお知らせした通り、今年度3回にわたって実施しているリーダー研修の第2・3回の様子をお伝えします。

・第2回（10月18日）

梅寿荘を会場に、2つのテーマについて1日研修を行いました。

まず、「苦情解決の基礎」というテーマで、こども支援センターあすなろ大西清司センター長に講義をしていただきました。対人援助の仕事であるがゆえ、ちょっとした言葉の行き違いや、対応の遅れなどをきっかけとした苦情に接することが多くあります。ご自身の経験を交えながら、要望が苦情に変わる前に気づくこと、起こってしまった苦情に対して誠実に対応することの大切さを教えていただきました。

続いて「人事考課」について、第1回に引き続きケアハウスあくなみ苑の田中将史苑長に講義していただきました。職員の人材育成の一環として取り入れている人事考課の制度を正しく理解し、部下を持つリーダーという立場で、どのように現状を把握し、チームの目標を互いに共有していくのかを学びました。



・第3回（11月28日）チームビルディング・ワールドカフェ

リーダー研修の講義を振り返りながら、参加者で情報交換会を行いました。まるでカフェのような雰囲気づくりをした中で、リラックスしてアイデアを出し合っていく「ワールドカフェ」と呼ばれる形式で行いました。「いいチームを作り上げていくリーダーとして、あなたはどうありたいですか？」という問いについて、和やかながらも活発に議論が深められているようでした。

法人役員会

平成29年4月1日に改正社会福祉法が施行されました。この改正を踏まえ今年度の役員会が開催されました。役員会を開催するにあたり定款の変更がなされ、ご存じのとおり、6月19日に開催された定時評議員会で監事2名、理事9名が選任され新体制の下、宝山寺福祉事業団がスタートしました。

また、財務規模が年間30億円を超える法人は監査法人による法定監査を受けることが義務化されました。わが法人は特定社会福祉法人という大規模法人に位置付けられ、監査を受ける立場になりました。

この監査法人については定時評議員会で監査法人彌榮会計社を選定いたしました。現在は、彌榮会計社に指導して頂きながら、内部統制に関する組織的な見直しや規定の整備などに取り組んでいます。

岩本登美子

―編集後記―

寒波襲来で、この冬の寒さは大変厳しいものでしたが、平昌オリンピックに日本中が熱くなりました。選手の皆さん感動をありがとう!!

閉幕となりオリンピックロストになってしまった方が多いのではないでしょうか。

私もその一人です。

この、お便りが皆様のお手元に届いている頃にはパラリンピックがもう始まっています。

再び熱い声援を送りましょう！

編集委員　森本